保育ふれあい体験を中心とした家庭科カリキュラム・イノベーションガイドブック

倉持清美(東京学芸大学)　阿部睦子(東京学芸大学附属高等学校)
金子京子(さいたま市立本太中学校)　妹尾理子(香川大学)
望月一枝(日本女子大学)

- 本ガイドブックでは、中学生が子どもへの共感性と次世代を育む知識と技能を身につけることを確かにする家庭科の授業のカリキュラム・イノベーション(革新)について紹介します。
- 中学校では家庭分野で、「A家族・家庭と子どもの成長」「B食生活と自立」「C衣生活・住生活と自立」「D身近な消費生活と環境」の内容を学びます。中学生は、親に保護され育てられている面がまだ大きいのですが、授業の「家族・家庭と子どもの成長」で幼児とのふれあい体験を通して、子ども達を守り育てる力や知識を身につけることができます。
- カリキュラムを革新することによって、中学生は今できることに気づき、将来安心安定できる家庭と地域をつくるために必要な力を身につけることができます。このことは、とても有意義なことです。

目次

1. 子どもと家族を取り巻く現状と課題
2. カリキュラム・イノベーションの方法
3. 事前授業例:
   「遊び場面の会話から発達を学ぶ」
4. ふれ合い体験の持ち方:
   「幼児と中学生とのかかわりを深めるための手立て」
5. 事後授業:
   ①ふれ合い体験をナラティブから読み取る
   ②ふれあい体験と住環境学習を関連づけた授業デザイン
   ③ふれ合い体験と食を関連付けた授業デザイン
6. カリキュラムイノベーションの成果

なぜ、保育ふれあい体験を中心とした家庭科カリキュラムを考えるのか？

中学校家庭分野の目標: 衣食住などに関する実践的・体験的な学習を通して、生活の自立に必要な基礎的・基本的な知識および技術を習得するとともに、家庭の機能について理解を深め、これからの生活を展望して、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる（「学習指導要領）

保育ふれあい体験学習に注目するのは、中学生が幼児とふれあう体験から多くのことを学べる学習であるからです。それは、人間が人間と出会うという全体性を持った体験で、知識や技能だけでなく、感受性や応答性も育みます。また、中学生にとって、幼児は、言語のコミュニケーションだけでは動かない異質な他者であり、過去の自分を見直す存在でもあります。未来的な意味では、幼児に働きかけることを通じて、育て・育てられることを学ぶ体験でもあります。

しかし、体験をして感想を書かせるといった授業では、貴重な機会を充分に活かすことはできません。中学生と幼児にどのようなふれあいをさせ、何をどのように学ばせるのかというカリキュラムを創り出すことが必要です。

カリキュラムとは、生徒が経験する学習経験の総体、学びの履歴を意味します。目の前の中学生がどのように幼児と出会い、何に困っているか、何に驚いているかを知ることから、カリキュラム・イノベーションは始まります。保育ふれあい体験学習は、中学生に課題を発見させ、解決に向けて、主体的・協動的に学ぶ（アクティブ・ラーニング）授業にふさわしい学習なのです。

参考文献　佐藤学、『カリキュラムの批評　公共性の構築へ』世織書房、2002
鯨岡俊『ひとがひとをわかるということ　間主観性と相互主体性』ミネルヴァ書房、2006

1.子どもと家族を取り巻く現状と課題

1.少子化：地域で様々な年齢の子どもとふれ合う機会は減少しています。そのため、出産して初めて小さい子とふれ合う親が増えています。

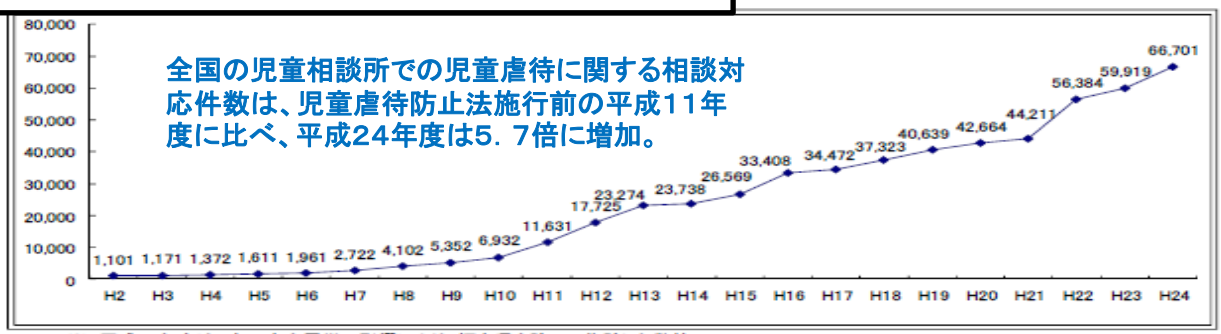
2.児童虐待：虐待には、身体的な虐待、心理的な虐待、性的な虐待、育児放棄(ネグレクト)があります。虐待の相談件数は増加傾向にあります。虐待は、直接的にも潜在的にも子どもの育ちに悪影響を与えるものであり、なくしていかなければなりません。

3.子どもの貧困：子どもの相対的貧困率が高くなっています。こうした中で、様々な体験が十分でないままに、親になってしまう可能性が高まっています。

4.核家族化：子育てを援助してくれる家族や地域でのかかわりが少ない中、子育てにストレスを抱えている親が増えています。

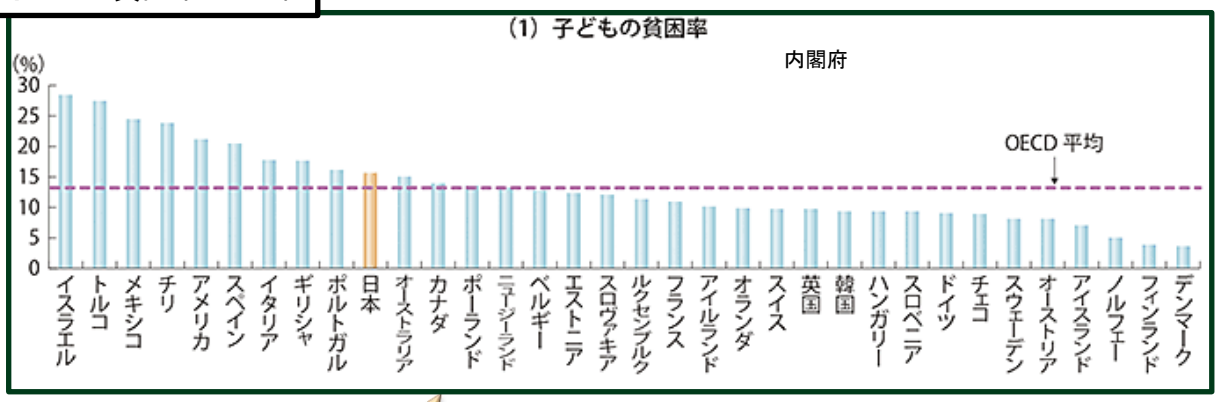
関係性の希薄化、自尊感情の低下など、子育てを難しくさせている

児童虐待相談の対応件数及び虐待による死亡事例件数の推移



※ 平成22年度は、東日本大震災の影響により、福島県を除いて集計した数値

子どもの貧困率:2010年



孤立しない子育て・虐待に陥らない幼児理解、かかわり方を学ぶ必要性

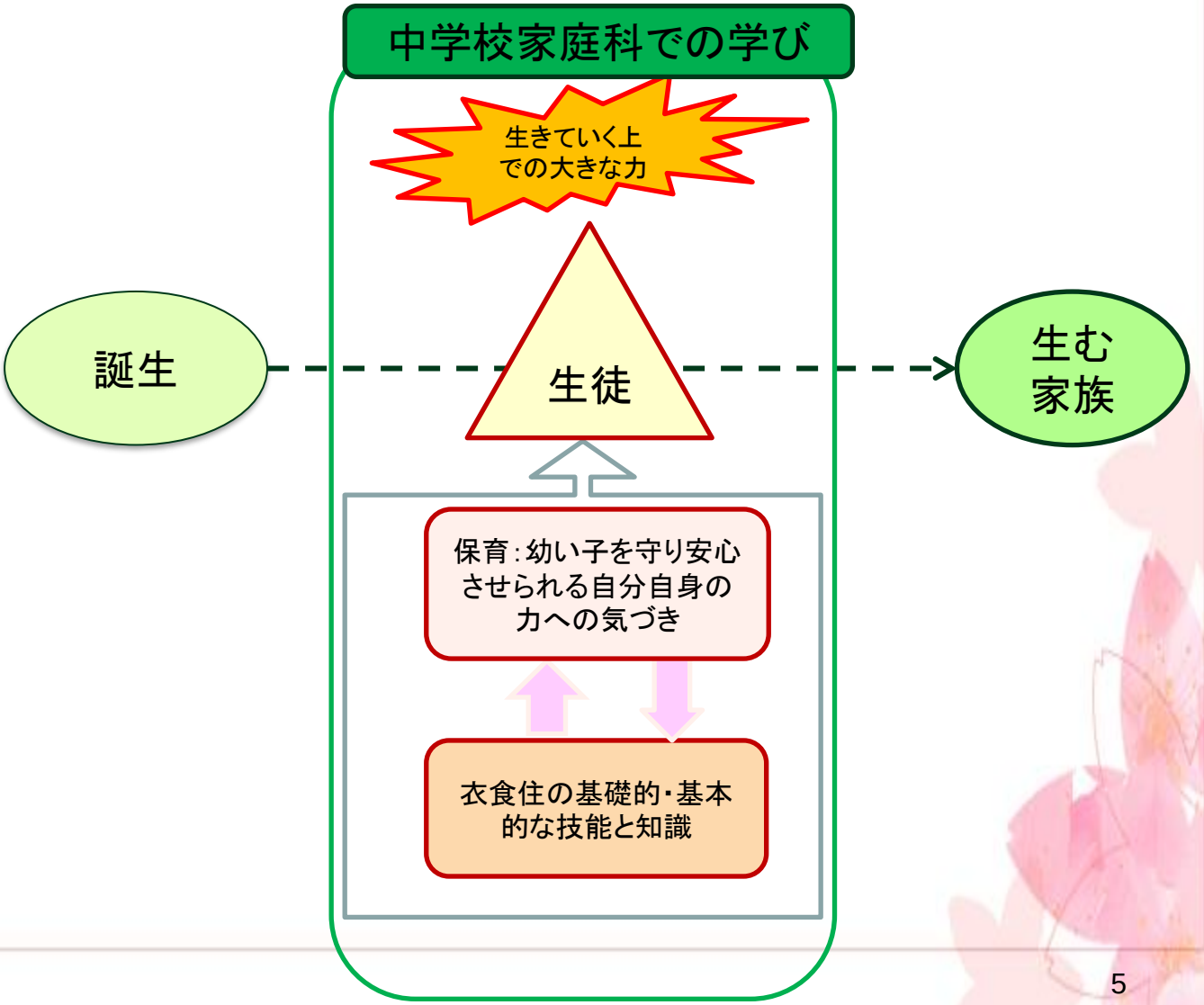
OECDによると，我が国の子どもの相対的貧困率はOECD加盟国34ヶ国中10番目に高く、OECD平均を上回っている。子どもがいる現役世帯のうち大人が1人の世帯の相対的貧困率はOECD加盟国中最も高い

義務教育家庭科の役割:子どもとふれあう体験をする・幼児理解を深める・子どもへの理解を深める

保育を学ぶ意義

生徒たちは、小学校家庭科で家族・家庭について学び、中学校で初めて保育を学びます。まだまだ家族の中で世話されることが多い生徒が、保育を学ぶ意義はどこにあるのでしょうか。

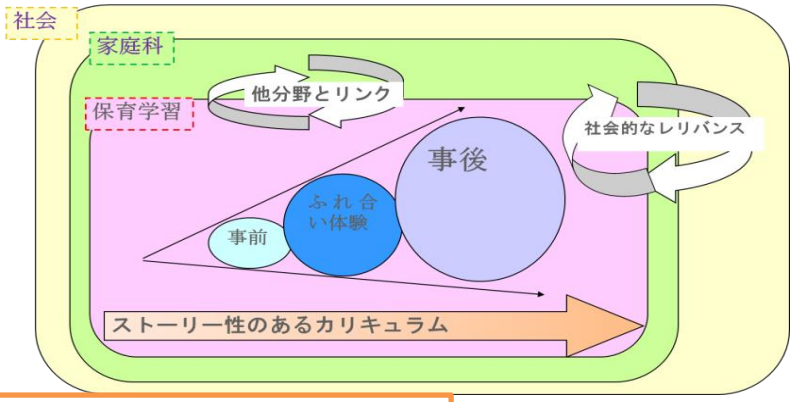
私たちの多くは、生まれた家族と自分たちがこれから作る家族(生む家族)の二つを経験します。前項で示したように、必ずしも自分の家族を肯定的にとらえられない状況にある生徒たちもいます。そうした生徒に、自分たち自身が家族を作り出す力を持っていると、自信をもたせるのも家庭科です。家族は、情緒的な安定が得られる場であることが何より大切です。そのために、心地よい住環境、栄養バランスのとれた食事、快適な衣服は必要条件であり、それを学ぶのが家庭科です。そして、保育では、ふれあい体験を通して、自分たちがすでに幼い子を守り安心させられる力を十分に持っていることに気づかせることができると考えます。それが、中学生の自信となり、また、これからの生活を目的をもって考えるきっかけにもなるのではないでしょうか。



2.カリキュラム・イノベーション
―新しい学びの創造―

①カリキュラム開発のポイント

・ふれあい体験を中心に事前と事後の授業にストーリー性を持たせます。
・他分野とリンクさせます。
・知識と技能を社会と関連付けます(レリバンス)。
・生徒の体験は、他の場面で応用できる経験とします。



ふれあい体験:幼稚園や保育園を訪問するだけでなく、園児が学校にきたり、あるいは保健センターなどに生徒が行ったり、親子が学校に来るなど、いろいろなパターンが考えられます。ここでは、園を訪問する場合を中心に取り上げます。

②園で経験できること

園では、子ども達が生活しやすい環境が整えられ、衣食住に関わる活動が展開しています。また、子ども達にとってとても大切な活動である遊びも豊かに展開しています。

住環境を考えるきっかけ

発達について考える

食について考えるきっかけ

子どもの周囲にいる年長者の役割について考える

衣服について考えるきっかけ

遊びの意味について考える

ふれあい体験の場で、何を経験してほしいのか、何を学んでほしいのか考え、事前学習の中身を検討する

ふれあい体験

ふれあい体験を生かし、事前の授業からつながる事後の授業

③カリキュラム・イノベーションの方法

1．ふれあい体験で中学生が体験していることを丁寧にみとります。
　・教師が中学生のかかわり方を観察し記録する。
　・中学生がどのように感じ考えたのかをナラティブに書かせる。
　　→教師が外側から生徒の姿を観察し、生徒のナラティブから生徒の内面で起きていることをつかむことは、教師の生徒理解を促し、カリキュラムを革新（イノベーション）するヒントを提供します。＊ナラティブはp10参照
2．事前授業のデザインには、ふれあい体験に必要な知識と技能を入れます。
　　→目の前の生徒にとって必要な知識と技能を再考しましょう。
3．体験で感じ考えたことを可視化・共有化し発展させる事後授業をデザインします。
　　→教師だけでなく、生徒と生徒が互いの学びの違いから学び、これまで得た知識や技能とつなげて言語化できるようにします。
4．1．2．3を繰り返しながら授業カリキュラムを革新（イノベーション）していきます。
5．ふれあい体験を衣食住の学習と結びつけてデザインすることも視野に入れましょう。

カリキュラムを保存し、見直す。生徒の作品を飾る

幼児の遊ぶ場を観察し、中学生に何を学ばせるか考える。

中学校　家庭科指導要領　A家族と子どもの成長
(3)　幼児の生活と家族について，次の事項を指導する。
ア　幼児の発達と生活の特徴を知り，子どもが育つ環境としての家族の役割について理解すること。
イ　幼児の観察や遊び道具の製作などの活動を通して，幼児の遊びの意義について理解すること。
ウ　幼児と触れ合うなどの活動を通して，幼児への関心を深め，かかわり方を工夫できること。
エ　家族又は幼児の生活に関心をもち，課題をもって家族関係又は幼児の生活について工夫し，計画を立てて実践できること。

3.事前授業

事例：遊び場面の会話から発達を学ぶ

＜ポイント＞

例1　幼児と接することが少ない生徒が、保育ふれあい体験の事前学習に、「年齢ごとの会話」を学ぶことで、幼児をイメージし、かかわり方を理解して接しやすくすることができます。・発達の相違（ごっこ遊びのなかで見られる相違）

例2　さまざまな幼児の会話のエピソードを用意することにより、幼児理解をさらに深めることができます。・発達の相違(4歳児と5歳児のなぞなぞの違い)

例3　保育者が登場する会話のエピソードからは、保育者のかかわり方の特徴を学ぶことができます。幼児の発達や個性に応じた支援を行っていることを理解させることができます ・幼児同士のいざこざ（保育者のいざこざへのかかわり方）

→これらの授業は、子育て支援の一環として、乳幼児を持つ親や中学生の保護者も参加し、一緒に学ぶことのできる授業でもあります。

＜授業計画＞

1対象　：中学校2，3年生のクラス　1時間から2時間（保育ふれあい体験の事前学習でなくても学習可）

2ねらい　：ふれあい体験における幼児理解のための事前学習

（年齢ごとの発達や個性の違いや保育士や幼稚園教諭のかかわり方を学ぶ）

：子育て支援の一環として、地域の保護者と一緒に学ぶ

3指導計画　（ふれあい体験学習の事前学習の流れ）

	時間	学習内容
1	1	幼児の成長と自分の成長の振り返り
2	2	幼児の遊び（新聞紙で遊ぶ・絵本の読み聞かせ）
3	2	幼児の会話から学ぶその1・その2
4	1	ふれあい体験学習の準備
5	2	ふれあい交流体験

	学習内容・活動　―　事前学習　1―	備考
導入5分	○授業後、交流学習を行うことを伝える **学習課題** **「幼児の発達を会話から学んでみよう」**	
展開40分	**発問1「会話から年齢ごとの特徴を考えよう** 3・4歳児「ごっこ遊びの場面」例1 4・5歳児「なぞなぞの場面」例2 4・5歳児「いざこざ」例3 **発問2「いざこざをやめさせないのはなぜか」** **発問3「保育者はなんと言ったのか」** **発問4「一言で幼児はぜ解決に至ったのか」**	年齢ごとによる遊びの違いを学ぶ ふれあい体験につながる学び
まとめ5分	○　授業を終えて学んだこと ○　自己評価、感想 次週の連絡	

3歳児の会話を分担し読み あい文脈が つながらない ことに驚く

幼児の保護者と一緒に授業

子ども達の遊びの写真を示すと、
イメージができて、興味がわく

遊び場面の会話事例

例1　発達の相違（3歳児と4歳児のごっこ遊びの場面）

例1　3歳児の「ままごと」の会話（べにおとれいこがおままごとコーナーでお医者さんごっこを始める。）

べにお　・いけない、私、お医者さん　行かなくちゃいけないのね
れいこ　・あ、私が赤ちゃん　風邪ひくから、お医者さん　行かないといけないのね
べにお　・私が、赤ちゃん、風邪ひいていないから大丈夫だわ
れいこ　・わかった。それで寝ているのね。赤ちゃんがね
べにお　・今日、ここに寝てください。あたし、看護婦さんね。ここに寝て下さい
れいこ　・はい、私が看病するからね
べにお　・はい
れいこ　・電話しますから、おかあさまね
べにお　・はい
れいこ　・病院いるの(この後動物園に行く話になる)

3歳児は、虚構の世界で、ストーリーの調整もせずに、2人で会話を楽しんでいる様子がわかります。生徒達が読むと、どのような遊びを展開しようとしているかがわらないが、2人で会話を楽しんでいる様子がイメージできます。

例1　4歳児の「ままごと」の会話(たかこ・りさ、えり、ちかがおままごとコーナーでお医者さんごっこを始める。この前に、おままごとをしていた)

たかこ　・ねぇ、おいしゃさんごっこしない
えり　・ねぇ、りさちゃんやろう
りさ　・最初、たかこちゃん、おいしゃさんごっこよ
たかこ　・あたし、じゃあ、看護婦さんになる
りさ　・お母さん達が、看護婦さんになるのね
えり　・いいよ
りさ　・えりこちゃん、看護婦さんよ
えり　・看護婦さんでいいんだよね
りさ　・あの人さ、ちかちゃんがさ、病人でさ
ちか　・ちがう
りさ　・お医者さん?
ちか　・お客さん
えり　・ちかちゃん、お客さんになって
りさ　・いい?
ちか　・うなづく
（この後、1時間以上もお医者さんごっこは続く）

4歳児は、現実の世界で役割分担をしっかりしてから、虚構の世界に入っていきました。だれがどんな役をするのかを決めて役に従って動くことが、楽しいのでしょう。

3歳児と4歳児では、同じお医者さんごっこでもずいぶん違いますし、何を楽しんでいるのかも違ってきますね。なぞなぞは、4歳では、問題を出して答えるやり取りを楽しんでいますが、5歳では、ちゃんと答えのあるなぞなぞを出すことが楽しいようです。発達や好みにより子ども達の遊びの姿がかわってきます。

例2　発達の相違（4歳児と5歳児のなぞなぞの場面）

〇4歳児クラスでお化け屋敷が作られ、出口でなぞなぞにこたえて、正解ならば出ることができるということになっていた。かずきが問題を出し、としやがこたえている場面
かずき　・頭がなくて、夜になると泣くものなんだ
としや　・えーと、こうもり
かずき　・ピンポン、いいよ出て
〇こうしたなぞなぞが行われているところへ、5歳児クラスのまさのりとけんたがやって来る
かずき　・頭がなくて、夜になると泣くものなんだ
まさのり　・えー、なんだよそれ
かずき　・頭がなくて夜になると泣くものだよ、こたえはかいじゅう
まさのり　・そんななぞなぞないよ、よし、おれがだしてやる
〇まさのりがなぞなぞを出す人になって、同じ5歳児クラスのけんたに問題を出す
まさのり　・冷蔵庫の中にいる動物なんだ、
けんた　・ぞう、
まさのり　・ぴんぽん、いいよ

例3　いざこざ（4歳児と5歳の対決の場面）

4歳児と5歳児が同じ砂場で山を作っていた。その日は、4歳児の方がなぜか高い山を作ってしまう。5歳児のけんとは、それが面白くないのか、4歳児の山が高くなると、壊しにいった。4歳児は嫌そうだが、何も言わない。保育者はその様子を遠くから見ていた。それが2回あった後、4歳児のたかしは、とうとう堪忍袋の緒が切れて、飛びかかろうとした。5歳児もすごむ。
そこへ保育者登場。保育者はここで「〇〇〇。」と言った。

例3の答えは、保育者の5歳児に対する、「〇〇君だったらどんな気持ち?」という問いかけでした。それを聞くと5歳児は「山対決やめやめ、みんなで大きなヤマを作ろう」と呼びかけました。保育者は、すぐに介入して解決方法を示すのではなく、子ども達に他者の気持ちに気づくように促しています。保育者と子ども達の間で信頼関係ができているからこそ、こうした保育者のかかわり方が子どもたちの心に入っていきます。

4.ふれあい体験の持ち方
幼児と中学生のかかわりを深めるための手立て

<ポイント>

・ ふれ合い体験の内容によって、学びは違います。まず、教師は、幼児と中学生がふれ合う時の媒体や、形態によって、経験することが違ってくることに注意しなくてはなりません。生徒の実態によって、今経験させたいことは何かを考え、ふれ合い体験の形態や内容を考えていきます。また、訪問する園側の事情によって、形態や内容が決まることもあります。そんな時も、そこからどのような経験ができるのかを予測し、事後の授業につなげていきます。

・ここでは、中学生が自分達の学習を元に考えた「食育レッスン」を媒体として幼児とふれ合う体験と、幼児のためにいろいろな遊びを考えて幼児を学校に招待する「スタンプラリー」を紹介します。また、ペアを組む場合と組まない場合では、体験がどのように異なるのかを考えてみましょう。

事例1. 食育レッスン

・ 中学生が幼児に「食育」について教える場面を「食育レッスン」と位置づけた。

・ 「食育レッスン」の準備を進める前に、園児の保護者への事前調査結果を紹介した。

・ グループ毎に、「食育レッスン」のテーマを考え、準備を進めた。

・ 幼稚園に行って、グループ毎に園児のグループと交流し、食育レッスンを行った。

・ 食育レッスン後、園児の保護者からの事後調査結果を紹介した。

園児の保護者への事前調査「家庭で気をつけていること」

栄養：栄養のバランスや彩り、季節の食材を使うこと、薄味にしていることなど

マナー：挨拶、お箸の持ち方や姿勢、テレビを消して食べるなど

工夫：子どもが苦手な食材を小さく切る、好きなものに混ぜるなど食べられるように工夫していることなど

お手伝い：配膳や片付けをさせていることなど

楽しく食べる：食事中にうるさくいわずに、楽しく食べられる工夫をしていることなど

<食育レッスンの内容例>

1班　カルシウム不足:　カルシウムの重要性　クイズ
2班　アツキくんのすききらい:好き嫌いをなくす　紙芝居
3班　手洗いうがいをしよう:食べるときの食べ方　紙芝居
4班　お行儀のよい子とわるい子:食べ方　○×ゲーム
5班　何でも食べよう:　好き嫌いをなくす　紙芝居
6班　食事をするときのマナー:マナー　○×クイズ
7班　手洗いうがいをしよう:手洗いうがいの大切さ　紙芝居
8班　嫌いな食べ物を食べよう:食べ方　紙芝居

<食育レッスンを含む指導計画>

1. 幼児の生活について概要理解　（3）
2. 幼児の食事風景の観察・振り返り　（2）
   幼児と一緒にお弁当を食べる
3. 幼児の心身の発達の理解　（3）
4. 食育レッスン・計画・準備　（3）
   ・交流の実施　（昼食時）
   ・振り返り　（1）
5. 幼児の生活と遊びのまとめ　（1）

園児の保護者への事後調査「家庭での子どもの声

「○○がおもしろかった」「ほうれん草が食べられるようなった」「食に興味を持った」「楽しかった」「もっと一緒にいたかった」など、子どもの具体的な感想が書かれていた。

「幼児は好き嫌いがあるという前提でレッスンが行われているがそうでない子もいる」という指摘があった。

・「食育レッスン」には中学生にとっては「食」の学習の振り返りとなり、「食」について学ぶ機会となるため、交流する双方にとって学習の効果が期待できます。

・「食育レッスン」では幼稚園児の保護者にアンケートを取ることで、保護者が幼児の気もちの代弁者として、幼児と中学生の橋渡しの役目を果たしてくれます。 また、親の気持ちも知ることができます。

事例2. スタンプラリー

スタンプラリーで交流する際、幼児とともに作り上げる「おもちゃ」はかかわりを深め遊びを促進する媒体として適する。

・ 中学生が幼児の遊ぶコーナーを作成して、幼児を中学校に招待した。

・事前に園を訪問して、保育者から幼児の好きな遊びについて話を聞いた。

・各班で相談して、幼児が取り組める遊びを考え、当日は、幼児かまわりやすいようにスタンプラリーとした。

交流学習のねらいから押さえておきたいおもちゃの役割

●交流を促進させる

→幼児とコミュニケーションの展開がある

→幼児に合わせた工夫ができる

●幼児理解が深まる（身体的・認知的・精神的発達など）

学びを促進するおもちゃ例

＜共につくりあげる要素がある＞

〇仮面作り→幼児の身体の大きさに気づく

〇ペンダント作り→幼児の好みを知る

〇ぶんぶんごま作り→幼児の器用さを知る

＜幼児とコミュニケーションが生まれる＞

●サイコロゲーム

●まねっこゲーム

生徒が提供した
おもちゃのベスト5

1. ボーリング（14班）
2. 輪投げ（12班）
3. 的当て（11班）
4. ストラックアウト（8班）
5. モグラたたき（6班）

これらの製作や遊びを通じで、どのような幼児理解が育まれるか考えておく

<スタンプラリーを含む指導計画>

	学習内容	時数
1	幼児を知ろう	1
2	幼稚園訪問	1
3	幼稚園訪問のまとめ	1
4	幼児の心身の成長	1
5	幼児の生活習慣	1
6	幼児の遊び	1
7	幼児と遊ぼう～スタンプラリー	3
	準備～交流～まとめ	
8	幼児の生活～おやつの意義	3
	準備～交流～まとめ	

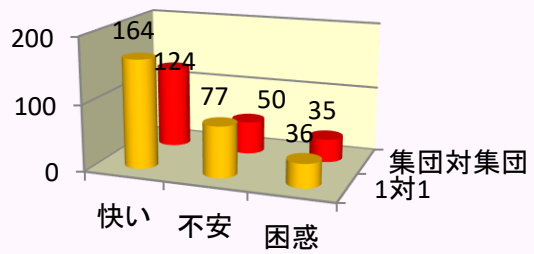
ふれ合い体験のパターンと学び

幼児と中学生が1対1のペアを組み自由遊び

幼児と中学生が集団対集団で一斉活動

生徒の実態や授業の目的によるパターンを選択や、事前事後の授業の工夫が可能

パターン別の生徒の感じ方



1対1の体験の方が、「快い」も「不安」も多いことがわかる。ペアを組むことによって、幼児との体験が密なものになり、「快い」経験も増えるが、同時に責任も感じることにより「不安」も増えるのかもしれない。

◎1対1の体験では、「早く仲良くなるために手をつないだ」「園児の会話でちょっと大げさに反応する」「サッカーでは時々ボールをとらせた」「なるべく多く名前を呼ぶこと」など、具体的な行動について様々な記述がみられた。

◎集団対集団では「話を合わせる」「優しい声で呼びかけた」「目線を同じくらいにする」などの記述が見られたが、ヴァリエーションは少なかった。

5.事後授業

①ふれあい体験をナラティブから読み取る

＜ポイント＞

- 幼児へのかかわり方を育てるためには、ふれあい体験を活かした事後学習が大切です。
  生徒が、どのような保育ふれあい体験をしているかを、教師はメモや写真・ビデオを撮り、事後学習に活かせるようにすることが大事です。さらに、幼児とかかわった時の様子をナラティブに書かせる　ことにより、時系列を追って、どのような園児と、どこでかかわり、その時々でどのようなことを考えたり、感じたりしていたかを、本人だけでなく教師も生徒の内面を理解することができます。
- ふれあい体験時の行動及び心情の再現（ﾅﾗﾃｨﾌﾞ）の共有化から、幼児の発達の特徴や個性を理解し、どのようなかかわりが交流を促進させたり、させなかったりするかを発表からまとめることができます。 さらに、自分の行動を分析し、改善する力をつけることにもつなげることができます。

ナラティブとは
「具体的な出来事や経験を順序立てて語る行為、およびその産物」として（野口、2009）が述べている。感想文のように、経験したことを整理して自分の考えをまとめて書くのではなく、具体的な行為やそれに伴う感情の変容などが、そのまま語られていく。

―保育体験後のまとめとしての感想に出てくる表現とナラティブの違い―

保育体験後の感想	保育体験後のナラティブ
○貴重な体験ができた○また行きたい○楽しかった○小さい頃の自分を思い出せた○幼児理解が進んだ（個人差、元気）○幼稚園の先生から学べた　等	○　時間にそった事実と気持ちを書くため、ストーリー性がある

事例. 幼児とのかかわり方を学ぶ:ふれ合い体験を可視化し共有化する

＜授業計画＞
1 対象　　：中学校２，３年生のクラス　３時間（保育ふれあい体験学習のすぐ後の時間に実施）
2 ねらい　：自分のふれあい体験を振り返り、どのような体験をしたのかを分析する。
　　：ナラティブの共有化から幼児へのかかわり方を学ぶ
（年齢ごとの発達や個性の違いや保育士や幼稚園教諭のかかわり方を学ぶ）→子育て支援の一貫

3 指導計画　（ふれあい体験学習の事後学習の流れ）

	学習内容	時数
1	自分のふれ合い体験をナラティブにする	1
2	自分のナラティブを分析する	1
3	ナラティブの共有化と幼児へのかかわり方を学ぶ	1

自分のナラティブを読み返しながら、うれしかった部分に赤線、不安を感じている部分に青線、困ってしまっている部分に黒線を引いたものを、黒板に書いて可視化し、共有化する

生徒のナラティブ
だいち君が「コートをつくるからどいてよ」とサッカーをしている幼児に言ったのですが、それで少しけんかがおきてしまいました。先生が来て「だいち君、どうしてほしいか言ってごらん」と言い、だいち君は自分の気持ちを伝え、なんとかけんかが終わりました。けれども、僕はただそのけんかを見ていることしかできず、自分のふがいなさに少しくやしさを覚えました。その後少し気まずい感じになり、どうしようかと悩んでいる時に、かるいはずみで転んでしまい、はずかしい・・・と思っているとだいち君が今まで見たことのないほど笑ってくれました。

4、指導例

板書例　ふれあい体験を可視化し、共有化する

幼児と遊んで楽しかったこと	幼児と遊んで不安だったこと	幼児と遊んで困ったこと	効果的な幼児とのかかわり方	幼稚園の先生からの学び
・幼児の笑顔 ・すぐ仲良くしてくれる ・素直 ・話しかけてくれる ・親切　等	・無視された ・仲良くなるか不安 ・何もしゃべらない ・話に興味を示さず ・無表情　等	・怪我をされたら心配 ・食べ方が汚い ・怖がられたこと ・ぶたれたり、蹴られたりしたこと 等	・目線を合わせ笑顔 ・自分から話す ・優しく相手を尊重 ・相手の好きな話題 ・スキンシップ 等	・自分から遊べるようにしむけていた ・遠くから見守る ・良い悪いをしっかり伝えていた

まとめ
幼児とのかかわり方で不安につながっていた幼児理解とかかわり方を教師が伝え、まとめる。

②ふれあい体験と住環境学習を関連づけた授業デザイン

＜ポイント＞

- 保育ふれあい体験では、生徒たちが子どもの育ちを支えるために意図された環境を実際に観察することができ、その環境の中で幼児とともに様々な活動を展開します。こうしたふれあい体験の特徴を活かした授業をデザインすることで、住まい学習と保育学習の両方の学びの充実が期待できます。
- 授業では、子どもの育ちを支えるために配慮された保育所の環境に生徒たちが具体的に気づくことと、子どもの育ちのためにどのような環境を作っていったらよいかを主体的に考える学習を取り入れます。その際、環境建築家である仙田満氏の遊び空間の6分類を参照し、保育現場の環境を丁寧に見取ることから、子どもが育つ住環境づくりについて理解を深めるきっかけとしました。

＜授業計画＞　「幼児が育つ環境を考えよう」

対象:　2学期にふれあい体験を半日実施している中学校3年生のクラス、1時間。

ねらい:

1. ふれあい体験学習で訪ねた保育園の環境について、観察結果を整理する
2. 「遊び空間の6分類」（仙田満）を手がかりに、子どものための住環境づくりを考える

わかりやすく色分けされたくつ入れ →

流れ　（下図参照）

1.ふれあい体験直後に、生徒が幼稚園環境について気付いたことをプリントに記入させる。その内容を集計して「安全・衛生・採光・快適性」「幼児の発達に合わせた環境」に分類してまとめたプリントを配布し、幼児のための住環境の特徴について気づかせる。その際、国内外の個性的な幼児施設の環境についても提示し、子どものための環境づくりについて考えさせる。

2.ふれあい体験に行った園では、どんな場所でどんな遊びが展開されていたかを思い出させる。次に、仙田満氏による遊び環境の6分類を参考にして、遊び空間を「道スペース」「アナーキースペース」「アジトスペース」「遊具スペース」「オープンスペース」「自然スペース」に分けて説明し、実際にふれあい体験で行った幼稚園の環境の写真を見せ、環境の特徴と子どもの遊びの特徴について考えさせる。さらに学区内のそれぞれの遊びスペースの有無やどこにあるかを考えさせる。（参考文献：仙田満『こどもの遊び環境』鹿島出版会）

3.身の回りの環境で子どもが育つ環境として、良い部分と改善したほうがよいところについて考えさせ、子どもの成長にとって大切な環境について知る。

流れ	学習活動	備考
導入 5分	・前時の内容を確認する。 ・自分がまとめたプリントを確認する。	自分がまとめた プリント2枚
展開 40分	1、住環境で気付いたことを分類（安全・衛生等）し、共有化する。 子どもの育ちを支えるための住環境の必要性について理解することができる。 2、子どもを育てる遊び空間の種類について考え、共有化する。 3、自分たちの学区を、子どもの遊び環境としてどうなのか考えて意見交換する。 子どもの遊び空間が育てる力とゆたかな住環境の必要性について理解することができる。	・訪問時の室内環境の写真を映す。 ・訪問時の、子どもが遊んでいる写真を映す。
まとめ 5分	・本時のまとめを行い、感想を記入する。 ・次時の内容について知る。	

↑　自然を生かした明るいホール

この後、続けて住まいの学習に入ります。
幼児の安全から、バリアフリーやユニバーサルデザインの学習や防災学習へと展開していくと、保育学習から住まいの学習への流れがスムーズです。

③ふれあい体験と食を関連づけた授業デザイン

＜ポイント＞

- 幼児は食事の際に、おしゃべりをたくさんしてくれます。そこで、中学生と一緒に食事をする場を設定することにより、幼児の会話から幼児理解を促進することができます。
- 親になり、幼児の食についてとまどう人も多いのが現状です。この授業を通して、幼児のお弁当の中身や食べ方から栄養バランスや食習慣についての理解が進みます。たとえば、幼児の保護者の方に嫌いなものを入れてもらうように依頼することにより、中学生が、かかわりを工夫する場を設定することができます。
- 食育劇を作成するために、幼児の栄養の摂り方や食習慣についての調べる過程で、小中学校で学んだ食に関するこ振り返りや、自分の食生活についても見つめなおすことができます。

＜授業計画＞　「幼児と一緒にお弁当を食べたことから学んだこと」

対象: 2学期にふれあい体験を半日実施している中学校3年生のクラス、1時間。

ねらい1、ふれあい体験学習で一緒にお弁当を食べた時の観察結果を整理する
2、観察結果をもとに、幼児の食育を考える

流れ　（下図参照）

ふれあい体験直後に、生徒に食事の時に気づいたことをプリントにまとめさせた。その内容を集計して「会話・食習慣・苦手な食品・食べさせ方」「幼児と中学生の食たプリン（トを配布し、幼児の食の特徴と食育について気づかせる。

流れ	学習活動	備考
導入 5分	・前時の内容を確認する。 ・自分がまとめたプリントを確認する。	プリント 2枚
展開 40分	発問1　各質問項目の共有化をしてみよう 質問1、食事の会話内容からわかること 質問2、食事の時間に育まれている食習慣 質問3、お弁当の中で苦手なもの 質問4、苦手なものがどうしてわかったか 質問5、苦手なものを食べさせるかかわり方 質問6、幼稚園教諭や友達のかかわり方で参考になったこと 質問7、幼児と中学生の食べ方に関しての違い 発問2「なぜ幼児は食事時に会話が多いのか」 発問3「食事時に会話が促進されることの効果」 発問4「集団で食べることの効果」	
まとめ 5分	・本時のまとめを行い、感想を記入する。 ・次時の内容について知る。	

発問への生徒の回答

○最近の幼児の興味関心について ➡ 妖怪ウオッチ、アンパンマン、ポケモン、プリキュア、仮面ライダー
○幼児自身の紹介 ➡ 家族構成、習い事についての話等

○生活習慣 ➡ 手洗い、消毒、はしの持ち方、挨拶等
○栄養面 ➡ よく噛んで食べる、残さず食べる等
○マナー ➡ 出歩かない、口に入れている時話さない等

○嫌いな食品 ➡ トマト（7人）人参（4人）ピーマン（2人）なす（2人）梅干し（2人）ポテトサラダ（1人）

○自分から教えてくれた○聞いたら教えてくれた○先生から教えてもらった○観察でわかった等

○一口大にして食べさせた○食べたら褒めてあげた○食品の良さを教えた○気長にあたたかく見守った○待ってあげた等

○時に厳しく、時にほめていた○、べたべたしすぎず良く子供たちのことを観察している○完食したときだっこしてあげていた

○ゆっくり食べる○おかずのひとつが小さい○量が少ない
○幼児は好きなものが多く入っているが、中学生の給食はバランスが良い○食べる時の会話が多い等

発問2:
食事時に会話が多いのはなぜ

1、座っているので落ち着いて相手の話ができる環境であるから　2、お腹が一杯になる快い体験だから　3、中学生と交流できることが楽しい体験だから

発問3:
食事時の会話の促進効果

1、人と食べることが楽しい　2、食べる時に会話をすると楽しい、3、人理解が進む、コミニュケーション能力が促進する　4、異年齢の人と食べることが楽しい

発問4:
集団で食べる効果

1、自分の家ではできないことは幼稚園ではできる効果が得られる。（マナー、好き嫌いの克服等）
2、楽しい雰囲気を壊さないようにする気持ちがうまれる。

6.カリキュラム・イノベーションの成果：

中学生が何を学んだか

事後学習　幼児とのかかわり方から学んだこと：幼児への共感性と幼児理解を深めた

○　交流したことをまとめて前よりも子供が好きになれたことに気がついた。
○　実際に自分が書いたものを振り返って読んでみるとまた新しい発見があるということがわかって良かった。
○　意外とこうしてまとめてみると結構不快に思うことなく、心が温まった2時間だったのかなと思いました。
○　幼児とのふれあいによって互いに学んだり、教えたりと勉強になるもんだなあと思いました。
○　自分とは違う発想を知ることができました。○　幼児との交流で今後に生かせることがたくさんあった。

事後学習　ふれあい体験と食を関連した授業から学んだこと：幼児にとっての食との意義と役割

○　嫌いなものを食べさせる際に、どのように接すればよいかがわかった。幼児の関心の引き方がよくわかった。
○　どの年齢でも人と話しながら食べる食事はとても楽しい。
○　中学生同士の食事よりも、違う年代との食事は新しいことだらけだと思った。
○　将来自分の子供になるべく好き嫌いのないようにするため、工夫して、栄養を考えてたくさんの料理の味を知ってほしいです。やっぱり子供が好きだなと思いました。
○　お弁当を食べるふれあいだけで、こんなに幼児のことがわかるんだなあと思いました。

事後学習　ふれあい体験と住を関連した授業から学んだこと：幼児期を支える住環境

○　子が安全に楽しく過ごすために大人が配慮しているのが勉強になった。国が違えば文化も違うので、日本と外国の幼稚園を比べるのはとてもおもしろかった。
○　子供たちがどんな場所でどのような遊びをして、どのような力が身に付くのかがわかった。自分は小さい頃ワイルドな遊びをあまりしていなかったので、自分の子供ができたら自分ができなかった遊びを安全に気を付けてやらせてあげたい。
○　小さい頃家の前で遊んで近所の人に怒られていたので「じゃあ遊ぶ場所作ってよ」と思っていたので、子供に適した環境をつくらなければいけないと思った。

事後学習　ふれあい体験学習全体を通して：新しい幼児イメージの構築と学びの社会的有用性(レリバンス)

○　幼稚園ではあっという間だったけど、そこからたくさんのことを学べて良かったと思いました。たくさんの違いがあって新しい発見ができてよかった。この授業は大人になっても役立つと思うので、すっと覚えておきたいです。３年間ありがとうございました。
○　１年間幼児とのかかわり方の授業をやってみて、はじめはめんどうくさいと感じていたが、幼児は確かにめんどうだが、その中で必死に学習をしている姿を見て、とても感心した。

保護者、保育者、中学校教員の気づき

子育て中の親が幼児の会話の授業を参観した感想：園の役割と中学生の再発見

○　幼稚園児なりに園でしっかり社会性を身につけていることを改めて認識しました。いくら家で教えようとしてもできないことなので、登園させるのには本当に大きな意味があることだと違う面から見た気がしました。同じ育児も親の立場と先生の立場では言葉のかけ方も違うということも再発見です。
○　命令口調で子供にわからせるのではなく、理解できる言葉で子供の心を動かしたほうが、納得できるということを再認識しました。納得できたことが子どもの成長と自信につながるように接していきたいと思います。
○　中３というどれだけ大人なのか、覚めているようなしっかりした姿を想像していましたが、意外に素直で真剣でしかも授業を楽しんでいる様子で、違う意味でびっくりしました。(小学生よりまじめですね)

中学生の親が、幼児の会話を参観した感想：家庭科保育の役割と再認識

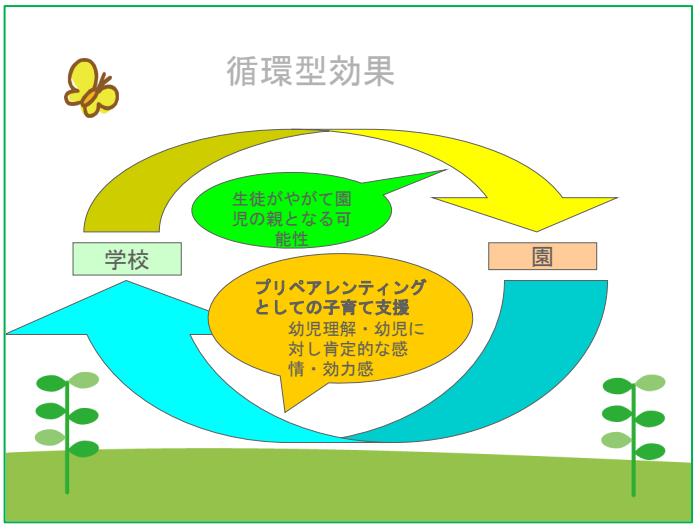
○　昔は生活の中で自然に身につくことができたことが今はそういう機会を作らなければ実につけられないのが現実だと思います。今の教育は知っておく必要のあることが後回しになっているような気がします。
○　生徒達が徐々に授業に引き込まれていく様子がわかり、とても興味深かった。他の数学や国語の授業の時とは違うと感じ　ました。
○　料理や被服も大切だと思いますが、生きていくうえでの基本は家庭、家族だと考えているのでこのような人間に関する授業(保育だけでなく介護なども)が、あると良いと思います。

保育者からの感想：異年齢交流の楽しさ

○　園児は、中学生のお兄さんお姉さんが来てくれることを大変楽しみにしています。あこがれにもなっています。
○　中学生がおいしそうに勢いよくお弁当を食べる姿を見ることから、楽しい雰囲気で食事が進み、食の細い子もたくさん食べてくれるのでうれしく思っています。
○　核家族化、少子化が進み、家庭の中で異年齢の交流がなくなってきているので、貴重なふれあい体験ができることを喜んでいます。

中学校の教員からの感想：思春期におけるふれあい体験の役割と家庭科への期待

○　進路で保護者との間で、ギスギスすることもある中で、生徒は、とてもふれあい体験学習を楽しみにしている。終わってからもとても良い表情が見られる。家庭でも当日の会話がたくさんできているようで、保護者からも大変好評です。
○　家庭生活を築き、生きていく上でとても重要な教科であると常々思っているので頑張ってほしい。



本研究は日本学術振興会科研費基盤研究(C)「家庭科における保育学習のカリキュラム・イノベーション研究」課題番号24500892の助成を受けたものです。

関連する研究成果

・幼児の会話教材を用いた授業の言語活動における教師の方略－授業ディスコースを中心に
望月一枝、倉持清美、金子京子、阿部睦子日本家庭科教育学会誌　第54巻第3号
pp.155-164 2011

・幼児の遊びの中の会話から展開する“発達”を学ぶ教材開発
妹尾理子、金子京子、倉持清美、望月一枝、阿部睦子　日本家庭科教育学会　第53巻第4号
pp.247-254　2011

・中学生の幼児への食育レッスン－保護者の視点を導入して－
阿部睦子、倉持清美、金子京子、妹尾理子、望月一枝、　日本家庭科教育学会第54回大会（口頭発表） 2011

・中学校の被服製作の振り返りとしてのナラティブと指示書の有効性
金子京子、倉持清美、阿部睦子、妹尾理子、望月一枝　日本家庭科教育学会第56回大会（口頭発表） 2013

・保育学習と住環境学習を関連づけた授業づくり－ふれあい体験を生かして－
金子京子、妹尾理子、倉持清美、阿部睦子、望月一枝　　日本家庭科教育学会第57回大会（口頭発表） 2014

・生きる力をつける学習-未来をひらく家庭科
望月一枝・倉持清美・妹尾理子・阿部睦子・金　子京子 編著　教育実務センター　2013